

令和2年度 関係人口創出・拡大のための中間支援モデル構築に関する調査・分析業務  
業務実施報告書

【貴団体概要】

団体名	公益社団法人 中越防災安全推進機構 にいがたイナカレッジ
事業名	地域に関わる多様な入口づくり

# 1 事業概要・主な成果

## 1.1 事業概要

“多様な担い手育成”を掲げて2012年から新潟県中越地域の農山村地域で若者を受け入れるプログラムを実施してきたいがたイナカレッジは、これまで1か月間・1年間農村集落に暮らしながら活動する“滞在型プログラム”が主流で、それによってプログラム終了後も地域に関わったり、そのまま定住したりする若者の姿が見られるようになったが、一方で長期間に渡るプログラムであるために、参加する側・受け入れる側の双方にとって高いハードルとなっていた。

このため本事業では、もっと気軽に参加できる・受け入れられるプログラムを開発し、既存のイナカレッジプログラムと合わせて、“地域に関わる多様な入口づくり”に取り組むこととした。また併せて関係人口の取組をより広げていくために、関係人口に関わる人材育成（コーディネーター養成）を行っている。

### 【本事業で実施するプログラム】

#### ◇オンラインプログラム（地域に興味のある若者等とのネットワークづくり）

—地域に興味がある若者等へのアプローチを図るため、地域との関わりなどについて考える「はたらくらすラボ」、地域を訪れなくても、地域の雰囲気などを感じられる「つながる暮らしレター」など、地域に関わるきっかけを提供するオンラインプログラムを開発。（参加者50人）

#### ◇おてつだいPlus（多くの人に参加しやすい・受け入れやすいプログラムづくり）

—農作業の繁忙期、集落行事や共同作業など、半日～数日程度の地域で人手が必要な場面のお手伝いを通して、地域の魅力を感じるプログラムの開発。（100人日派遣）

#### ◇関係人口に関わる人づくり

—上記取組の実践活動を通じて、関係する行政関係者などを対象に、プログラム設計やコーディネートのポイントなどの共有し、関係人口コーディネーターの養成につとめるとともに、関係人口の考え方や手法などを取りまとめたテキストの作成。（研修参加10人）

## 1.2 主な成果

「おてつだいPlus」参加者	85人日
オンラインプログラム参加者	延べ69人
OJT研修への参加	6人

今後も継続的に地域と関わりを持ちたい若者 52人  
(同様の取組に参加したい、さら深く地域に関わるプログラムに参加したい)

オンライン・日帰り型など、気軽に参加できるプログラムを開発したことで、参加者をその後より本格的な地域との関わりが作れるプログラムへと誘導することができるようになり、イナカレッジとしては①地域に関わる多様な入口づくり、②地域と深く関わるスムーズな階段づくり、への手応えをつかむことができた。

## 2 モデル事業実施地域の概要と課題

### 2.1 事業実施地域の概要・課題

#### (1) 新潟市南区 関係人口の取組で、課題を解決するきっかけをつかみたい

本地区は新潟市中心部から車で30分程で、西洋梨（ルレクチェ）、ブドウ、モモなど県内有数の果樹産地である。家族経営が主で、農繁期には人手が足りずシルバー人材センターに依頼するほか、農業公社でも働き手の募集等を行っているが、繁忙期が同時期に重なるため、それでも尚人手が足りていない。一方で市内には8つの四年制大学が存在し、中には農学部の学生もいるため、このような若い人材とのマッチング、および長期的には新規就農者受入の仕組みづくりが求められている。

#### (2) 出雲崎町 関係人口の取組で、地域の前向きな変化を促したい

2019年に町民アンケートを実施したところ、住民からは「店がない」「病院がない」「不便しかない」など、町に対する不満の声が数多く挙げられ、そのような大人で育った16～18歳を対象にしたアンケートでは「将来出雲崎町で暮らしたくない」が65%であった。これでは町としていくらか施策を打っても現状を打破することは難しく、地域づくりの原点である「無い物ねだりから、有る物探し」という住民の意識変革が求められる。

#### (3) 村上市山北地域 前向きな集落の動きを持続化させたい

村上市山北地域では、2019年度にイナカレッジのプログラムを通して3人の大学生が1か月間集落に滞在し地域づくり活動を行った。この取組を通して手応えを掴み、地域の若手を中心に空き家を活用した滞在・交流拠点づくりなどに着手している。特に「短い滞在で良いので、何度も集落に来てくれる仕組みがほしい」という要望が挙げられ、大学生の受入を通して前向きに動き出している集落に対して、継続的に人の流れを生み出す仕組みをつくっていくことが求められている。

### 2.2 関係人口創出・拡大に関わる取組みのビジョン・テーマ設定

#### (1) イナカレッジが目指すもの

地域に共感して、一緒に汗を流して一緒に活動する、地域の“多様な担い手”を増やしたい

—過疎化が進んでもその地域に関わる人や応援してくれる人（共感者）がいて、それによって地域の人たちが「自分たちの暮らす地域は価値あるものなんだ」「まだまだ頑張れる」という前向きな気持ちで地域づくり活動に取り組む地域・人を残していきたい。

—都市に暮らす若者等にとって、農村地域の人や暮らしに触れることで様々な価値観に出会い、自分に合った“活き方”を見つけるきっかけを作りたい。

#### (2) 本事業のテーマ

地域への多様な人口づくりの実現

これまでイナカレッジで実施してきた、1か月・1年間の滞在型プログラムに加え、本事業を通してもう少し気軽に参加できる・受け入れやすい新たなプログラムを開発することで、地域に関わる“多様な人口づくり”に取り組む。

### 3 モデル事業の取組内容

#### 3.1 取組みの全体像・スキーム

【目指すもの】

**地域に共感して、一緒に汗を流して一緒に活動する  
“多様な担い手”を増やしたい。**

—過疎化が進んでもその地域に関わる人や応援してくれる人（共感者）がいて、それによって地域の人たちが「自分たちの暮らす地域は価値あるものなんだ」「まだまだ頑張れる」という前向きな気持ちで地域づくり活動に取り組む地域・人を残していきたい。

—都市に暮らす若者等にとって、農村地域の人や暮らしに触れることで様々な価値観に出会い、自分に合った“活き方”を見つけてのきっかけを作りたい。

【既存】お米レター

概要：県内一人暮らし学生を対象に、農村地域からお米と手紙を発送し、受け取った学生から農家にお礼の手紙を送り返し、料理の写真をSNSで発信。その後お礼・お手伝いツアーを実施。

【既存】ツアー型地域づくりプログラム

概要：都市部に暮らす人々を対象に、地域の具体的なプロジェクトに関わり、メンバーの一員となって一緒に地域づくり活動を実践するプログラム。

【既存】1か月農村農村インターン

概要：若者の学び・成長×地域活動の促進・前向きな変化を目的に、大学生が1か月間地域に滞在し、具体的な地域づくり活動を実践する地域づくり型農村インターンシップ。

【既存】アグリバス

概要：地域農業の担い手の育成に向けて、月の半分を野菜農家でのお手伝い、残りの半分を集落の暮らしと米づくりを学ぶ、1年間のライフスタイル型就農プログラム。

地方に関わる  
きっかけづくり

日帰り・数日型  
プログラム

通い型  
プログラム

短期滞在型  
プログラム

長期滞在型  
プログラム

《本事業で実施する取組》

#### 地域に関わる多様な入口づくり

特にこれまでイナカレッジでは、1か月や1年間地域に滞在する“ガッツリ系”のプログラムが主流であったため、本事業では、「きっかけづくり」や「日帰り・数日型」などライトなプログラムを開発し、地域に関わる多様な入口づくりを進めていく。

#### オンラインプログラム

目的：実際に地域を訪れなくても、地域との関わり方を考える場・つながるきっかけを提供し、「地域に行ってみよう」と喚起し、より深く関われるプログラムへの誘導。

内容：これからの働き方・暮らし方、都市での暮らしの違和感（モヤモヤ）などを言語化・共有しつつ、地域での暮らしや関わりについて考える「はたらくらすラボ」、地域の特産品等を活用したオンラインワークショップ「つながる暮らしレター」など、地域に関わるきっかけを提供するオンラインプログラムを開発。（参加者50人）

#### おてつだいPlus

目的：地域のお手伝い+αのプログラムを通して、参加者の地域への共感を育む。

内容：農作業の繁忙期、集落行事や共同作業など、半日～数日程度の地域で人手が必要な場面のお手伝いを通して、地域の魅力を感じるプログラムの開発。（100人日派遣）



#### 関係人口コーディネーターOJT研修

目的：関係人口コーディネーターの育成

内容：実践活動を通じてプログラム設計やコーディネートポイントなどの共有。テキスト作成。（研修参加10人）



#### 【私たちが目指す関係性】

関係性は“共感”によって生まれるもの。

共感 = 一緒に過ごす時間×かいた汗の量  
(共通体験)

#### 存在承認の関係性

「〇〇さんに会いに行きたい」

「〇〇ちゃんが来てくれて嬉しい」

#### 3.2 期待される効果・KPI

##### (1) 事業全体としての成果目標

###### ① 参加者の意識変化・今後の意向

—本事業参加者のうち、今後も継続的に地域と関りを持ちたい（同様の取組に参加したい、さら深く地域に関わるプログラムに参加したい）意向を示す若者等の数：30人

###### ② 受入側の意識変化・今後の意向把握

—本事業を実施したことで、次年度以降若者等の受入に取り組む意志のある集落・農家・事業者等（次年度以降の関係人口受入体制）：10

##### (2) 個別事業の成果目標

###### ① より多くの人に参加しやすい・受け入れやすいプログラムの開発

○おてつだいPlus 参加者数：100人日

○次年度以降「おてっだいPlus」の受入体制：10（集落・戸・社）

② 地域に興味がある若者等の人材ネットワーク（人材プール）づくり

○オンラインプログラム参加者：延べ50人

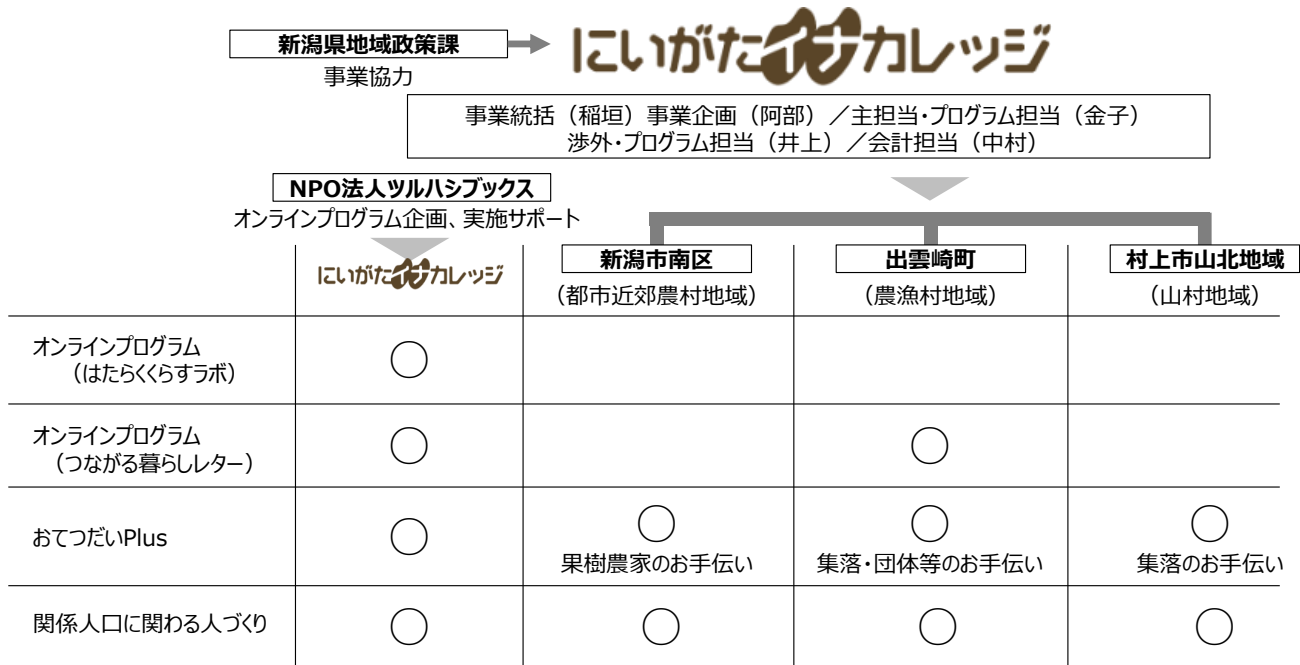
○地域に興味がある若者等のネットワーク：100人

③ 関係人口に関わる人づくり

○OJT研修への参加：10人

## 4 事業実施に係る運営体制

### 4.1 事業実施体制



### 4.2 事業実施団体及び関係機関の役割

◇新潟市南区（産業振興課）／地域おこし協力隊／JA新潟みらい

- ・農家等への広報活動、果樹農家・花卉農家の紹介等
- ・果樹農家・花卉農家を対象にした「おてつだいPlus」のプログラム設計
- ・実施にあたってのコーディネートサポート

◇出雲崎町（総務課）／地域おこし協力隊／常楽寺集落／(株)磯野紙風船製造所

- ・地域のお手伝い需要の調査
- ・出雲崎町における「おてつだいPlus」のプログラム設計
- ・プログラムの受入、実施にあたってのコーディネートサポート
- ・「つながる暮らしレター」プログラム設計・実施サポート

◇村上市山北支所（地域振興課）／中継ふるさとづくり推進委員会／大毎集落

- ・受入地域の紹介、お手伝い需要の調査
- ・村上市山北地域における「おてつだいPlus」のプログラム設計・実施サポート

◇NPO 法人ツルハシブックス：はたらくらすラボプログラム企画、実施サポート

◇新潟県地域政策課：事業内容の共有、実施協力（県内市町村へのつなぎ等）

## 5 事業実施内容

### 5.1 実施スケジュール

スケジュールは下表のとおりである。当初の想定から、以下の変更点があった。

◇「おてつだいPlus」は、新型コロナウイルス感染症の拡大にともない、1月・2月に予定していたプログラムが中止となった。

実施事項	8月			9月			10月			11月			12月			1月			2月					
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下			
<b>1. おてつだいPlusの試行・仕組化</b>																								
1 関係者打ち合わせ・詳細な制度設計	行政・JA等の関係機関との打ち合わせ																							
2 お手伝い調査の実施、プログラム作成	農家・地域ヒアリング			農家ヒアリングプログラム作成			引き続き、農家・地域に対してヒアリングを実施し、季節ごとの仕事のプログラム作成																	
3 お手伝い掲示板作成（HP）																学生・若手社会人にとって最適なアプリを選定し、お手伝い掲示板を作成								
5 参加者募集							HP記事作成・参加者募集活動															広報活動の再検討		
6 おてつだいPlus試行実施・コーディネート							お手伝いの実施コーディネート																	
7 受入地域・農家等ヒアリング、アンケート							調査の実施																	
8 参加者ヒアリング、アンケート							調査の実施															参加者との意見交換会の実施		
9 事業化に向けた改善、関係者への提案・協議							マッチングの仕組みの検証、事業化に向けた関係者協議																	
<b>2. イナカレッジ・オンラインの開発</b>																								
「オンラインワークショップ」																								
1 オンラインワークショップ企画・準備	協力者との打ち合わせ																							
2 広報活動（参加者確保活動）	第1回分広報活動			第2回分広報活動			第3回分広報活動			第4回分広報活動						第5回分広報活動								
3 オンラインプログラムの試行実施																								
4 参加者アンケート	★ 第1回はたらくらすラボ8/25			★ 第2回はたらくらすラボ9/24			★ 第3回はたらくらすラボ10/25			★ 第4回はたらくらすラボ11/24						★ 第5回はたらくらすラボ開催1/19								
5 次年度に向けたプログラム化検討																								
「つながる暮らしレター」																								
6 地域との調整、プログラム設計	関係者打ち合わせ、プログラム作成						関係者打ち合わせ、プログラム作成																	
7 広報活動（動画作成、参加者確保活動）																								
8 つながる暮らしレター試行実施																								
9 参加者アンケート・地域ヒアリング																								
10 次年度に向けたプログラム化検討																								
<b>3. 関係人口に関わる人づくり</b>																								
1 定期的なコーディネートポイント確認ミーティング																								
2 テキストの作成																								
3 次年度以降の講座実施検討																								
<b>4. 成果検証・次年度に向けた関係者協議</b>																								
1 定期的なコーディネートポイント確認ミーティング																								
2 テキストの作成																								
3 次年度以降の講座実施検討																								
<b>4. 成果検証・次年度に向けた関係者協議</b>																								
1 定期的なコーディネートポイント確認ミーティング																								
2 テキストの作成																								
3 次年度以降の講座実施検討																								
<b>4. 成果検証・次年度に向けた関係者協議</b>																								
1 定期的なコーディネートポイント確認ミーティング																								
2 テキストの作成																								
3 次年度以降の講座実施検討																								
<b>4. 成果検証・次年度に向けた関係者協議</b>																								
1 定期的なコーディネートポイント確認ミーティング																								
2 テキストの作成																								
3 次年度以降の講座実施検討																								
<b>4. 成果検証・次年度に向けた関係者協議</b>																								
1 定期的なコーディネートポイント確認ミーティング																								
2 テキストの作成																								
3 次年度以降の講座実施検討																								
<b>4. 成果検証・次年度に向けた関係者協議</b>																								
1 定期的なコーディネートポイント確認ミーティング																								
2 テキストの作成																								
3 次年度以降の講座実施検討																								
<b>4. 成果検証・次年度に向けた関係者協議</b>																								
1 定期的なコーディネートポイント確認ミーティング																								
2 テキストの作成																								
3 次年度以降の講座実施検討																								
<b>4. 成果検証・次年度に向けた関係者協議</b>																								
1 定期的なコーディネートポイント確認ミーティング																								
2 テキストの作成																								
3 次年度以降の講座実施検討																								
<b>4. 成果検証・次年度に向けた関係者協議</b>																								
1 定期的なコーディネートポイント確認ミーティング																								
2 テキストの作成																								
3 次年度以降の講座実施検討																								
<b>4. 成果検証・次年度に向けた関係者協議</b>																								
1 定期的なコーディネートポイント確認ミーティング																								
2 テキストの作成																								
3 次年度以降の講座実施検討																								
<b>4. 成果検証・次年度に向けた関係者協議</b>																								

## 5.2 事業の広報・アプローチ

「おてっだい Plus」「はたらくくらすラボ」「つながる暮らしレター」の広報活動（参加者確保）については、イナカレッジの HP および SNS での発信を基本とし、このほかに以下の取組を行った。

◇おてっだい Plus：主に県内の学生・若手社会人を対象としていたため、県内の 20 代・30 代に絞った facebook 広告を行うほか、イナカレッジが有する県内大学生とのネットワークを活用し、サークルや興味のある学生などに情報拡散への協力を依頼した。実際のプログラム参加につながっていたのは、やはり学生からの情報拡散がもっとも効果的で、また一度参加した学生がプログラムの満足度が高かったため、そこからさらに友人にプログラムを紹介してくれるなど、口コミの効果が大きかった。また今年度はコロナ禍で大学の授業がオンラインになり、学外活動も出来ないため、イナカレッジのプログラムに対する反響（ニーズ）が大きく、スムーズな参加者確保につながった。

◇はたらくくらすラボ：主に首都圏の地方に興味がある 20 代に対して facebook 広告等を活用した広報活動を行った。しかし実際に参加していただいた人は、以前からイナカレッジの存在を SNS 等で知っていたとする人が多く見られた。

◇つながる暮らしレター：県外在住の 20 代に対して facebook 広告を活用した。つながる暮らしレターは参加者のほとんどが SNS の広告などを見て、本プログラムを通じてはじめてイナカレッジを知ったとする人たちであった。

## 5.3 活動内容① おてっだい Plus

参加しやすい・受け入れやすい半日～数日型のプログラムとして、地域のちょっとした人手が必要な場面にヨソモノが加わり一緒に汗を流す、“お手伝い”という関わりしろから、地域の共感・関係性を育むプログラムとして「おてっだい Plus」を実施した。

“農家のお手伝い”（個人）と“むらのお手伝い”（集落・団体等）の二パターンのプログラムを準備し、受入先からは、“一緒にご飯を食べる”“ハネモノなどをお土産として渡す”など、お手伝いのお駄賃として“お金ではない価値”を提供し、“労働と対価”ではない関係性づくりに努めた。

### (1) 農家のお手伝い

「農家のお手伝い」は、新潟市南区の農家のうち、特に手作業が多い果樹農家を中心に受入先の開拓を行った。協力いただけそうな農家一軒一軒に訪問して事業の趣旨等を説明し、賛同いただいた農家から随時、県内都市部在住の農業・農村に興味がある若者とのマッチングを行った。

【地域】新潟市南区

【受入】8 農家/19 回のお手伝い

【参加者】延べ 44 人日（新潟市内在住者）

【作業内容】和梨やル・レクチェ、ブドウなどの収穫・出荷作業、など

【お駄賃】お土産（商品として出荷できない傷物・ハネモノ）、お昼ご飯を一緒に食べたり、農家から直接農業に対する想いを語っていただくなど

農家のお手伝い			
	日時	受入農家	参加者
1	9月24日	中村農園	2人
2	9月29日	中村農園	3人
3	9月29日	FARM GENTS	2人
4	10月11日	渡辺葡萄園	3人
5	10月11日	とみやま農園	2人
6	10月15日	高井農園	1人
7	10月17日	栗田 隆夫	2人
8	10月17日	石附農園	2人
9	10月18日	フルーツ童夢	2人
10	11月7日	栗田 隆夫	3人
11	11月7日	中村農園	3人
12	11月14日	フルーツ童夢	4人
13	11月19日	石附農園	2人
14	11月21日	とみやま農園	2人
15	11月28日	中村農園	2人
16	〃	渡辺葡萄園	2人
17	〃	FARM GENTS	2人
18	12月5日	中村農園	3人
19	12月19日	中村農園	2人
計			44人

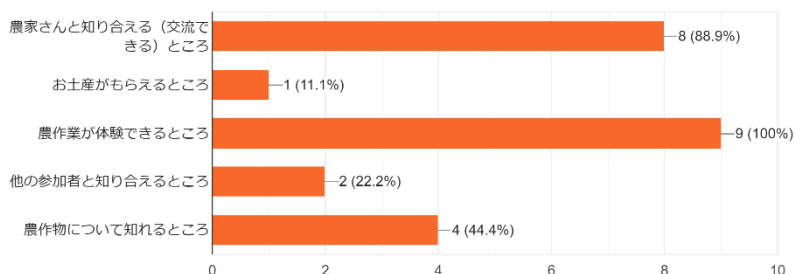


ど“お金ではない対価”をいただいた。

参加者の感想としては、参加する前は農作業や農家との交流に期待し参加したが、実際に参加すると、お土産や農作業の体験、農作物について知れたことなどが満足度につながり、すべての参加者が今後も同様のプログラムに参加したいという意向を示した。

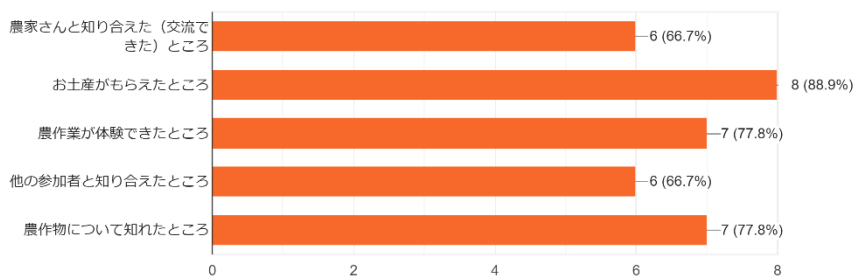
今回のおてつだいのどの部分に期待していましたか

9件の回答



実際にやってみてどの部分が魅力的でしたか

9件の回答



## (2) むらのお手伝い

地域のお手伝いでは、出雲崎町は日帰りのプログラムとして、地域にある蔵や集落の公会堂の掃除などを行い、村上市山北地域では、赤カブの収穫や空き家の掃除などを行う1泊2日のプログラムとして実施した。

【地域】 出雲崎町、村上市山北地域

【受入】 4地域/7回のお手伝い

【参加者】 延べ41人日（新潟市、長岡市、柏崎市、小千谷市在住者）

【作業内容】 蔵・公会堂・空き家の掃除、野菜の収穫

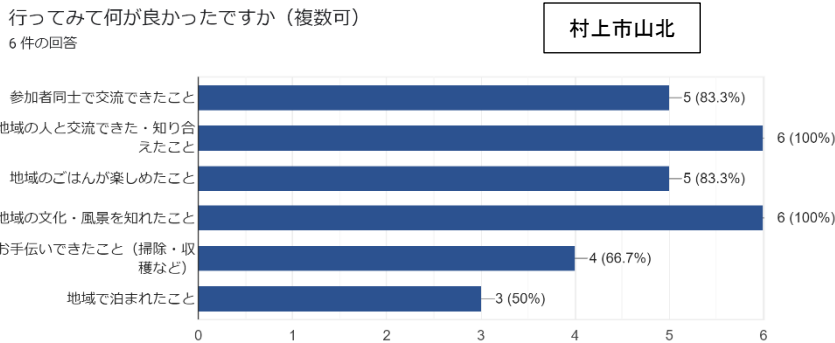
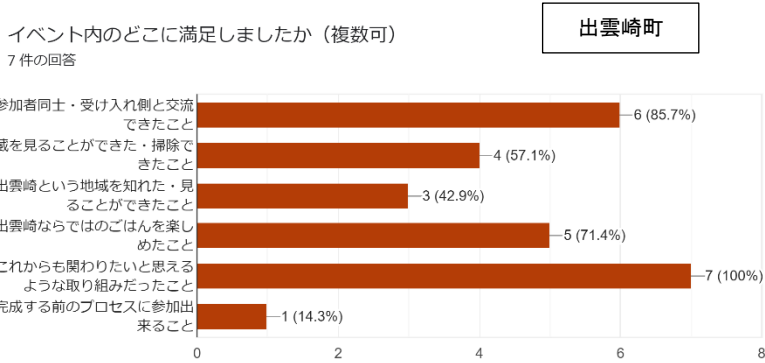
【お駄賃】 ご飯を一緒に食べる、まち歩き、地域文化等に触れる機会（地域の伝統産業、狩猟等）の提供、お土産、など

参加者アンケートでは、地域の人との交流、地域の文化・風景を知れたこと、地域の面白いプロジェクトを知れたことなどが参加者の満足度につながっていた。

### むらのお手伝い

	日時	受入地域	参加者
1	10月21日	出雲崎町海岸地区	10人
2	10月24日	村上市大毎集落	4人
3	10月25日	村上市大毎集落	5人
4	11月7日	出雲崎町海岸地区	12人
5	11月20日	出雲崎町常楽寺集落	4人
6	11月21日	村上市中継集落	3人
7	11月22日	村上市中継集落	3人
計			41人





また、「おてっだい Plus」の参加促進を図るため、ロゴの制作、および専用ページ・申し込みフォームなどを整備した。



## 5.4 活動内容②オンラインプログラム

都会の暮らしに違和感を感じていたり、言葉に出来ないモヤモヤを抱えていたり、それによって地域に関心を寄せる若者との恒常的なつながりをつくるツールとして、オンラインを活用したプログラム「はたらくくらすラボ」を試行した。

また、コロナ禍にあって首都圏を中心に、県外の若者が農村地域に訪問しなくても、関係性を築き地域の空気が感じられるオンラインプログラムとして「つながる暮らしレター」を開催した。

### (1) はたらくくらすラボ

これまでイナカレッジのプログラムに参加して、地域との関わりを持ったり、定住した20代の若者をゲストに招き、地域での暮らしや地域との関わり方を紹介。参加者が今の暮らしや働き方から感じている違和感などを参加者同士で言語化・共有し、その上で参加者一人ひとりに合った地域との関わり方を模索するとともに、イナカレッジから具体的な地域の入口などを紹介する約2時間のオンラインサロンを開催した（各回定員15人）。

**第1回はたらくくらすラボ** 2020年8月26日(火)19:00~21:00/参加者12人

ゲスト：橋本 和明（イナカレッジのプログラムへの参加を機に、柏崎市に移住した20代）



テーマ：「現代の百姓になる」

**第2回はたらくくらすラボ** 2020年9月24日(木)19:00~21:00/参加者14人

ゲスト：梶谷 麻貴（イナカレッジのプログラムに参加後、東京から地域との関わる20代）

テーマ：「やりたいことは、ひそかにさがす」

**第3回はたらくくらすラボ** 2020年10月25日(日)19:00~21:00/参加者10人

ゲスト：亀山 咲（イナカレッジのプログラムを通じて、自分のやりたいことを見つけた20代）

テーマ：「退学したかった私が、夏の農村で気づいたこと」

**第4回はたらくくらすラボ** 2020年11月24日(火)19:00~21:00/参加者9人

ゲスト：工藤 京平（イナカレッジのプログラムを機に自分にあったモノサシを見つけた20代）

テーマ：「幸せっていちいち楽しんでみるごと」

**第5回はたらくくらすラボ** 2021年1月19日(火)19:00~21:00/参加者13人

ゲスト：西田 卓司（チューニングファシリテーター）

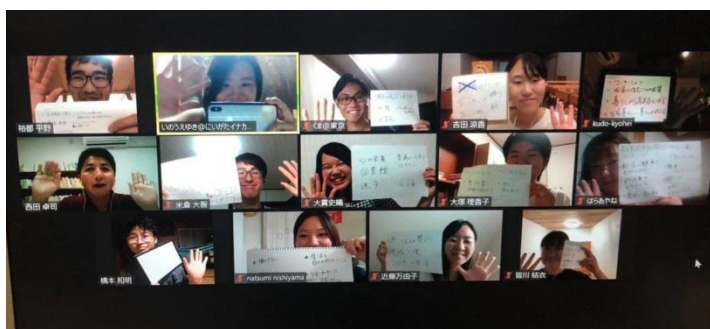
テーマ：これまでの“はたらくくらすラボ”を振り返って

**はたらくくらすラボスピンオフ企画** 2020年11月19日(木)19:00~21:00/参加者4人

※参加者自身が自分でプログラムを企画・実施してみたいとの要望から行ったプログラム。

### 【各回のプログラム概要】

- ・自己紹介、イナカレッジの紹介
- ・ゲストトーク+ゲストへの質問タイム
- ・グループに分かれてのキーワードトーク
- ・感想、まとめ



## (2) つながる暮らしレター

当初は、地域から“農村の暮らしが実感できる届け物（米や野菜）”などを手紙と一緒に参加者に郵送し、参加者からお礼の手紙を送り返してもらい、且つオンラインによる交流会やワークショップを開催する想定であった。しかし、実際にオンラインで参加者にとっても地域にとっても満足度が高く意味のあるプログラムとはどのようなものか、またその後も地域と参加者が関わりを持ち続けられるようにするためにどのような仕掛けをしたら良いのかなどを考えた結果、出雲崎町の紙風船を題材にしたオンラインワークショップを開催した。

今回実施したプログラムでは、事前に参加者に紙風船を郵送し、オンラインで紙風船のデザインワークショップを開催した。出来上がった作品は、観光協会が主催する「紙風船デザインコンテスト」に応募し、作品は道の駅で展示されるため、プログラム終了後の地域訪問の動機づけになることを期待した。

### 【プログラム概要】

開催日時：2021年1月17日(日)10:30~12:00

参加者：7人

プログラム概要：

- ・会の説明、自己紹介



- ・ 出雲崎の紹介
- ・ 紙風船のデザインワークショップ
- ・ 感想、デザインコンテストの応募方法、など

## 5.5 活動内容③ 関係人口に関わる人づくり

### (1) OJT 研修

「オンラインプログラム」「おてつだい Plus」を3市町で実施するなかで、行政関係者や地域団体等と一緒に協議しながらプログラムを企画・実行することで、関係人口に関わる考え方や手法などについて共有を図る OJT 研修を企画した。

新潟市南区：行政職員 1 人、地域おこし協力隊 1 人

出雲崎町：行政職員 1 人、地域おこし協力隊 2 人

村上市山北地域：行政職員 1 人



しかしながら、いずれの地域でも新型コロナウイルス感染症拡大により、地域住民・団体等を巻き込み、議論しながらプログラムを企画・設計することができず、結果としてイナカレッジが聞き取った地域の要望に基づいて、一部行政職員等と協議しながらプログラムを設計した。このため当初想定していたような OJT 研修のイメージと大きくかけ離れてしまった。

### (2) 関係人口テキストの作成

これまでのイナカレッジの活動、および本事業の取組などから見えてきた関係人口の考え方や手法などを取りまとめたテキスト「共感から生まれる、関係人口～にいがたイナカレッジが実践する関係人口の考え方と手法」（全 48 頁）を制作・印刷し、県内全市町村の関係人口担当部署、および関係者などに配布した。



はじめに

1. 関係人口とは
2. にいがたイナカレッジと関係人口
  - (1) にいがたイナカレッジの取組
  - (2) 地域づくりの段階
  - (3) 地域づくりにおける関係人口の役割
  - (4) 地方を求める若者のタイプ
  - (5) イナカレッジが目指すもの
  - (6) 関係人口をつくる「場所」と「場面」
3. 関係人口を増やすための場所づくり
  - (1) よそ者を受け入れる 3 種類の関わりしろ
  - (2) よそ者を受け入れる効果
  - (3) 地域づくり型プログラムの注意点
  - (4) イナカレッジは、あくまでも地域の入口の一つ
4. 関係性を育む場面づくり
  - (1) 関係性とは
  - (2) 関係性を育みやすい規模感と受入体制
  - (3) 結果よりも大事なプロセス
  - (4) コーディネーターの役割
5. よく聞かれる質問 (Q&A)
6. おわりに

## 6 モデル事業としての成果検証

### 6.1 事業成果（目標達成状況）

#### 事業の目標・達成状況

	目標 (定量目標の場合は目標数値も記載)	達成状況
1	参加者の意識変化・今後の意向把握 —本事業参加者のうち、今後も継続的に地域と関わりを持ちたい（同様の取組に参加したい、さら深く地域に関わるプログラムに参加したい）意向を示す若者等の数：30人	52人
2	受入側の意識変化・今後の意向把握 —本事業を実施したことで、次年度以降若者等の受入に取り組む意志のある集落・農家・事業者等（次年度以降の関係人口受入体制）：10	10
3	より多くの人参加しやすい・受け入れやすいプログラムの開発 ・おてつだいPlus 参加者数：100人日 ・次年度以降「おてつだいPlus」の受入体制：10（集落・戸・社）	・参加者：85人日 ・受入体制：10
4	地域に興味がある若者等の人材ネットワーク（人材プール）づくり ・オンラインプログラム参加者：延べ50人 ・地域に興味がある若者等のネットワーク（直接連絡のやり取りができる新たな若者等の数）：100人	・参加者：延べ69人 ・ネットワーク：74人 ※いずれのプログラムもリピーターとなる参加者が想定よりも多く、実人数としての目標に達しなかった。
5	関係人口に関わる人づくり ・OJT研修への参加：10人	6人

### 6.2 事業成果（関係人口の地域とのかかわり方）

#### (1) おてつだい Plus

##### ① 地域との関わり

- ・手伝いに行った参加者と農家とが連絡先を交換して直接連絡を取るようになり、イナカレッジが仲介しなくても作業を手伝いに行くような例が見られた。（新潟市南区）
- ・お手伝い参加者が、その後地域のイベントに参加した。（出雲崎町）
- ・一方別の地域では、プログラム参加後に地域のイベントに参加しようとしたが、イベント自体が新型コロナウイルス感染症により中止になったり、あるいは地域外から人を受け入れることが難

しくなり、再訪することが出来なかったという例もあった。（村上市山北地域）

- ・お手伝いに参加したことで地域に愛着が生まれ、当該地域で R3 年度実施予定の夏休み 1 か月インターンシップへの参加を表明した。（村上市山北地域）
- ・カメラを趣味とするお手伝い参加者に、その後地域から仕事の依頼があった。（出雲崎町）
- ・これまでお手伝いに来てくれた人を対象に、地域で感謝祭イベントを企画中（3 月実施予定）。（出雲崎町）

## ② 関係性を育むポイント

- ・「農家のお手伝い」参加者の満足度としては、食べきれないほどのお土産をいただいたこと、農家さんと一緒にご飯を食べたり、その中で農業に対する想いや作物のことを知れたこと、農作業が体験できたこと、などが挙げられていた。特に話し好きな受入農家ほど「また行きたい」という参加者の声が多く聞かれた。
- ・「むらのお手伝い」参加者の感想としては、地域の人とつながりを持てたこと、地域の文化や風土を知れたことなどに対して満足したとする声が多いほか、これからも関わり続けたい面白い地域の取組に出会えた、などの意見も挙げられた。

## (2) オンラインプログラム

- ・「はたらくくらすラボ」では参加者同士のオフ会や地域を訪れるツアーなどが企画されたが、新型コロナウイルス感染症拡大により実施には至らなかった。
- ・つながる暮らしレターでは、ワークショップで実際に作った作品を「オリジナル紙風船デザインコンテスト」に応募するとともに、応募作品は町内の道の駅に展示されるため、今後参加者が地域を訪問することを期待したい。

## 6.3 事業成果（プログラムの手応え、実施してみたの気づき等）

---

### (1) おてつだい Plus

#### ① 農家のお手伝い

- ・「おてつだい Plus」は、労働力を提供する代わりに“お金ではない価値”（一緒にご飯を食べる時間やお土産など）を提供するものであるが、アルバイト代などが出る訳ではなく、企画段階ではどこまで参加ニーズがあるのか不安があった。しかし実際に蓋を開けてみると、想像以上に“農家さんとの交流”や“一人では食べきれないほどのお土産”などに価値を見出し高い満足度が得られ、地域に関わる最初の一步として「おてつだい Plus」の可能性・手応え掴むことができた。
- ・受入先の農家からは、単純に労働力として喜ばれるほか、若い人たちとの交流機会に価値を感じる声も挙げられた。「来年、使っていないうちの離れで寝泊りして良いよ」「今度は一緒に商品開発をしてみたい」などの前向きな声も聞かれた。今年度受入を行った 8 軒の農家のうち 6 軒は、R3 年度も現行のかたちで受入を継続したいとのことであった。
- ・一方で、農作業のお手伝いとして充てにするのであれば、同じ人に一定期間来てほしいという声もあったが、現実的には、平日は授業や仕事を抱えているため、土日中心に実施せざるを得ない。また「手伝いだけであれば高校生のアルバイトと同じ。大学生・社会人であればもう一段上の取組ができない。」などの意見も見られた。

## ② むらのお手伝い

- ・受け入れた地域の感想としては、労働力（お手伝い）ということよりも、地域外の若い人たちに関わってもらえることに価値を見出す意見が多かった。
- ・村上市山北地区大毎集落では、2日間にわたり「おてつだいPlus」の受入を行ったが、次年度さらに本格的な若者の受入を行いたいと地域から要望が挙げられ、R3年度夏に1か月間の農村インターンシップ事業を実施することとなった。
- ・出雲崎町常楽寺集落では、おてつだいPlusを実施したことで外から来る人たちと一緒に活動することのイメージが湧き、次年度から地域おこし協力隊を受け入れることになった。

## (2) オンラインプログラム

### ① はたらくくらすラボ

- ・当初は、イナカレッジと都市部の地方に興味がある若者がつながる手法として「はたらくくらすラボ」を考えていたが、参加者の感想をうかがうと、今の暮らし、働き方、言葉に出来ないモヤモヤ感など、色々なことに悩んだり違和感を感じている若者の姿が多く見られた。
- ・このような人たちにとって、地域との関わりを通して自分の暮らしのモノサシを見つけたゲスト（イナカレッジインターン生 OBOG）の話は心に響くものがあつたと感じられた。少しでもモヤが晴れたり、気持ちが楽になる、そんな場として「はたらくくらすラボ」が機能し、地域に興味のある若者とのつながりづくり、コミュニティづくりということが、オンラインでも出来るという手応えを感じた。
- ・“地域に関わるきっかけづくり”ということと合わせて、若者がこれからの自分の生き方を考える場として、「はたらくくらすラボ」は続けていく必要がある大事な取組だと実感した。

### ② つながる暮らしレター

- ・紙風船ワークショップは参加者の満足度が高く、地域からも「またやりたい」という意見が挙げられた。
- ・一方で、例えばもともと地域とのつながりを持っている人が、オンラインを活用して交流することはできるが、オンライン上で“はじめまして”の状態から、地域と若者の関係性を築くことは非常にハードルが高いと感じた。

## (3) 関係人口に関わる人づくり

- ・新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、当初想定していたような、OJT研修のイメージとはかけ離れてしまったが、一方そんな中でも「おてつだいPlus」の実施回数が多かった（コロナの影響をあまり受けなかった）新潟市南区では、プログラムの企画や受入農家の開拓段階から行政職員と議論しながら進められたため、関係人口の考え方やプログラム設計、実施する上での課題などを共有することができた。
- ・同時に「おてつだいPlus」の成果・手応え（地域への影響等）なども共有できたため、次年度以降同じ目線で一緒に取り組める連携・協力体制ができ、本事業では、規模感としては当初の想定を下回ったものの、OJT研修の効果・手応えを感じる事ができた。
- ・また、これまでのイナカレッジの活動、および本事業を通して得た知見などを整理した関係人口に関わるテキスト「共感から生まれる、関係人口」を取りまとめたことで、今後関係人口のプログラムを水平展開する上での有用な資料を完成させることができた。



#### (4) 事業全体をとおして

- ・本事業をとおして、今後も地域に関わりたいとする52人の若者とのつながりを持つことができた。この52人のうち、より本格的（長期的）なプログラムに参加したいとする若者も見られ、次年度以降の関係人口プログラムへの誘導がしやすい環境整備ができた。
- ・日帰り型など気軽に参加できるプログラムを実施したことで、その後より本格的なプログラムへと誘導することができるようになり、イナカレッジとしては①地域に関わる多様な入口づくり、②地域と深く関わるスムーズな階段づくり、への手応えをつかむことができたことが大きな成果であった。

## 6.4 本年度の課題と対応

---

### (1) おてつだい Plus

- ・課題としては、大きく「足の問題」「日程の問題」「調整の問題」の3つが挙げられる。

**【足の問題】**参加者の多くが県内に暮らす大学生であったため、自家用車を所有する人はほとんどいなかった。このため現地までは公共交通機関を利用して行かなければならないのであるが、新潟市南区には鉄道が走っておらず、バスも数時間に1本程度であるため、現実的には公共交通で行くことができなかった。

今年度は、現地コーディネーター（市職員や地域おこし協力隊）やイナカレッジのスタッフが送迎するなどの対応を行っていたが、次年度以降の継続的な実施に向けて、南区の乗り合いタクシーとの連携、地域の民間タクシー会社との年間契約などの方法について現在協議を進めているところである。

**【日程の問題】**参加者アンケートからは、学生がお手伝いに参加しやすい時期としては9月を挙げる一方、受入農家の繁忙期は6月、10～12月となる。次年度はまず参加者が動きやすい9月を中心に「おてつだい Plus」を実施し、参加者と受入農家の関係性づくりを進めていくこととする。そうすることで、その後農家から直接「○日から収穫作業やるんだけど…」という声をかけていただくことで、“行ける範囲でお手伝いに行く”関係性を生み出したいと考えている。

**【調整の問題】**今年度はすべてイナカレッジが農家の人手需要の時期や作業内容、およびそれに合わせた参加者の募集や作業日の調整、当日の集合場所や移動手段の確保などの各種調整を行っていた。しかし、「おてつだい Plus」は日帰り・数日型のプログラムであるため、開催頻度が高くなればなるほど、調整の手間が大きくなる。一方で、参加者の中には単に作業を手伝う以上に、もっとプログラムの企画などにも関わりたいとする学生なども見られた。このため、一農家・一学生という体制づくり（農家ごとに学生担当を定める）に向けて、学生コーディネーターを確保・育成し、農家の仕事や参加者募集など、コーディネート体制の強化を図ることとした。

### (2) オンラインプログラム

- ・イナカレッジと都市部の若者がつながるツールとして、オンラインプログラム（はたらくくらすラボ）の可能性を感じることができた一方で、オンラインで直接地域と若者の関係性を築くことの難しさも感じた。
- ・参加者にとって満足度の高いプログラムを作ることはそれほど難しくはないが、それが地域にとって実感をとまなう意味のある内容にする、且つその後地域に訪問する導線を描くなど、様々な要素を満たすプログラムづくりに苦慮した。

## 6.5 今後の事業のあり方

---

### (1) おてつだい Plus

- ・受入農家の考え方（若者が手伝いに来る価値、期待していること）や作業内容（栽培している作物等）など、おてつだい Plus の仕組みには、受入農家の“向き・不向き”があることがわかったため、今年度受け入れていただいた農家を基本に、改めて受入先の農家の開拓を進めていきたい。
- ・また、今年度は県内大学生の参加がほとんどであったが、次年度からは若手社会人へのアプローチを強化することとしたい。

### (2) オンラインプログラムの位置づけ

- ・今年度2種類のオンラインプログラムを試行したが、オンラインプログラムとしては、直接地域住民と地方志向の都市部の若者とをつなげるというよりも、中間支援組織と都市部の若者がつながる仕組みとして活用を図りたい。
- ・またオンラインプログラムで関係性を築くというよりは、地域を訪れるプログラムへの参加の呼び水という位置づけのもと、次年度以降のオンラインプログラムを進めていきたい。

## 7 自立化・自走化の検討

### 7.1 おてつだい Plus

#### (1) 実施体制・プログラム

- ・基本的には、今年度と同様のかたちで「おてつだい Plus」を継続する予定としている。
- ・ただし、受入先農家については、経営作物や作業内容、繁忙期、受入農家の「おてつだい Plus」に期待することなどを踏まえて、再度検討し直すこととする。
- ・運営に関わりたいという学生も数名あらわれ、事務局の調整事務の軽減を図るためにも学生コーディネーターを確保・育成（一農家・一学生のコーディネート体制づくり）を進めていく。

#### (2) 運営費用

- ・本事業実施前は、次年度以降の運営資金として、参加費の徴収、受入側の負担金の可能性などを探ることとしていた。「農家のお手伝い」の場合、実際に受入農家からアルバイト代相当の費用を支払っていただくことは可能であるが、一方で専業農家であるが故に、繁忙期にはピリピリとした空気があり、そこからアルバイト代相当の費用を徴収する場合、労働力としての期待値が非常に上がり、参加者は役に立つか・立たないかで評価され易くなってしまいう（労働と対価の関係になってしまい、それは私たちが目指すものとは異なる）。
- ・このため、次年度は参加者の交通費等の実費程度を受入農家の受益者負担とし、コーディネートなどの運用費用については、一定の公的資金（現在新潟市では、市予算、南区のまちづくりサポート事業の活用などを検討、出雲崎町では地域おこし協力隊に係る経費、中山間地域等直接支払制度の活用などを検討）を活用することで、現在行政機関等と協議を行っている。

#### (3) 課題と対策

- ・足の問題は、新潟市南区で実施している乗り合いタクシーとの連携（最寄り駅から農家までの送迎）を図ることで、現在関係課と調整するほか、民間タクシー会社との年間契約などについても今後協議を進めていく。あわせて、交通手段の心配がいない若手社会人の参加者確保を図るための情報発信を強化していくこととする。
- ・同時に、参加者が数日程度滞在できる拠点として、農家の離れの活用を試験的に実施するほか、中期的には既に何件かピックアップしている空き家を活用した滞在拠点の確保を図りたい。地域内に滞在拠点を確保することで、県外からの参加者も呼び込むことも進めていく。

### 7.2 オンラインプログラム

#### (1) 実施体制・プログラム

- ・イナカレッジとしては、オンラインで直接地域と若者をつなぐということではなく、中間支援組織と若者のネットワーク化を目的に「はたらくくらすラボ」を継続的に実施する。
- ・「つながる暮らしレター」は、参加者の満足度、地域側の実感、その後の来訪への導線など、様々な要素を満たすテーマ探しを関係者と一緒に行うなかで、改めてプログラム化に努めるとともに、内容に応じたプログラム名称を定める。

## (2) 運用費用

- ・「はたらくくらすラボ」は実費がほとんどかからないため、既存のイナカレッジプログラムの応募促進活動の一環として費用を確保する。
- ・出雲崎町では、「つながる暮らしレター」（紙風船ワークショップ）の第二弾を企画しており、運用にあたっては、地域おこし協力隊の活動費用を充てる予定としている。

## (3) 課題と対策

- ・「はたらくくらすラボ」では、毎回リピーターで参加する人が多く見られコミュニティ化が図られる一方で、蛸壺化しないように注意する必要がある、新規参加者の獲得に向けた発信を行っていく必要がある。
- ・プログラムの性質上、有料広告を使えば参加者が集まるというものではないため、つながりのある大学の先生の協力、参加者の口コミ（情報拡散依頼）などを図りながら、新たな参加者の確保に努めることとしたい。

## 7.3 人づくり

---

### (1) 実施体制・プログラム

- ・講義研修なども考えられるが、その効果は受講する人の当事者意識によるところが大きく、今後イナカレッジの取組を実施する地域の行政職員や地域関係者などを中心に、実践的な活動をとおとして一緒に議論・協議しながらプログラムを進め、コーディネーター育成を図ることとする。
- ・同時に、新潟県が実施する「地域づくり実践塾 OJT 研修」の一つのメニューとして、関係人口に関わるコーディネーター育成を進めていく。

### (2) 運用費用

- ・「おてっだいPlus」やその他のプログラム（1か月の農村インターンシップなど）の実施費用、および新潟県「地域づくり実践塾 OJT 研修」の費用で実施する予定。

## 8 他地域への横展開の可能性の検討

### 8.1 他地域への横展開を図る上での前提となる考え方

- ・関係人口の考え方や手法は多様であるが故に、他地域で同様の取組を実施する場合、プログラム設計や運用などの具体的な“手段”を検討する前に、実施する地域において、外部の人たちとどのような関わりを作り、それによってどのように地域づくりを進めていきたいのかという“目的”と、「おてつだいPlus」や「オンラインプログラム」がその手法として本当に適切なのかを見定めることが重要と考える。
- ・その上で、理想としては一つのプログラムを単体として考え地域と外部者の関係性づくりを図るのではなく、深く地域に入っていくための関わり方のステップ（地域への階段）を描いたうえで、おてつだいPlusやオンラインプログラムなどの一つひとつのプログラムを位置づけた方が、効果的な関係人口づくりにつながるであろう。

### 8.2 他地域への横展開を図る上での留意点

#### (1) おてつだいPlus

##### ① 受入先の開拓

- ・受入先が農家の場合、事前に趣旨などを丁寧に説明しないと、単なる“人足”として捉えられてしまう可能性がある。特に費用面を考えると、受入農家からはアルバイト相当分の費用を徴収することはできるが、そうするとアルバイト費以上の価値を求められ、それは“労働と対価の関係”に陥りやすい。どのような関係性を築きたいのかということ念頭に置いたうえで、費用捻出の方法を考える必要がある。
- ・受入先が地域・集落の場合、“もてなす”にならぬように注意が必要である（“交流疲れ”の二の舞にしないようにしなければならない）。関係人口をつくる（よそ者を受け入れる）ために作業を用意するのではなく、地域・集落で人手が欲しい時期にあわせてプログラムを企画するという考え方が大切である。

##### ② 交通手段の確保

- ・恐らく多くの地域で、現地までの足の確保が課題となるであろう（金銭的な問題というよりも、そもそも現実的に公共交通では行けないという地域が多い）。受入先の農家等が最寄り駅まで迎えに行くことも考えられるが、そもそも人手が欲しいというニーズに合わせて実施するプログラムであるため、送迎に手間が取られてしまっただけでは本末転倒になってしまう。年数回程度の頻度でイベント的に実施するのであればコーディネーターが送迎しても良いが、恒常的な仕組みとして「おてつだいPlus」を実施するのであれば、民間タクシー会社との連携など、それぞれの地域の実情に合った方策を考える必要がある。
- ・割り切って現地集合・現地解散という考え方もできなくはないが、いずれにしてもそれぞれの地域の実情に即したプログラムづくり・カスタマイズが必要と考える。

##### ③ 連携先・地域

- ・「おてつだいPlus」は、人手が欲しい時期のお手伝いという側面と、アルバイトとは違う交流的

要素（その後もつながる関係性づくり）があるため、このような考え方の両立に対して理解・協力いただける農家・地域の開拓が重要となる。

- ・またプログラムの成果を共有し、取組への理解・継続性を図るためにも、企画段階から行政機関の積極的な関わりは必要であると考ええる。

#### ④ 課題と対策

- ・受益者負担、参加費等を徴収する必要性はあるが、これで賄えるのはプログラムにかかる実費程度（足代、保険料等）であろう。コーディネートにかかる費用など、運用面にかかる費用については、市町村の予算、中山間地域等直接支払など、一定の公的資金の活用・参加費等との組み合わせが必要と考える。

## (2) オンラインプログラム

### ① 事業スキーム・プログラム

- ・オンラインを活用して、誰と誰の関係性・つながりを作りたいかということで、具体的なプログラムの内容が変わってくる。
- ・特にオンラインプログラム単体で関係性をつくるのではなく、実際に地域を訪問し活動できるプログラムとセットでオンラインプログラムを実施することで、より関係性づくりの効果が発揮されると考える。。

(つながる暮らしレター)

- ・このようなプログラムを企画する際、参加者の満足度をあげることに目が行きがちになり、地域の人たちが手間暇かけてやってみたが成果が実感できない、という状況に陥りやすい。
- ・参加者の満足度をあげるプログラムを企画するのはそんなに難しいことではないが、同時に地域にとって意味のある内容、地域の人たちにとって手触り感がある内容にするとともに、参加者がその後地域を訪問する動機（導線）づけなど、様々な条件を満たすプログラムづくりが必要であり、企画力が問われる。

### ② 課題と対策

- ・単に“オンラインで交流しましょう”では、参加者にとっても、主催者にとっても、地域にとっても実施の意義が見い出せなくなり継続が難しくなるので、オンラインプログラムの位置づけ（目的）の明確化・共通認識を持つ必要がある。